様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２４０２

研究課題名（和文）古代イランとメソポタミア―歴史地理学的アプローチ

研究課題名（英文）Ancient Iran and Mesopotamia: A Historical and Geographical Study

研究代表者
前川　和也（Maekawa, Kazuya）

国士舘大学・イラク古代文化研究所・研究員

研究者番号：６００２７５４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではバビロニア楔形文字資料、イラン国立博物館蔵文書を主資料とし、考古発掘成果も参照しつつ、古代イラン―バビロニア世界の関係が分析された。
本研究での諸発見（前3千年紀末バビロニアの南西イラン制圧、2千年紀前半アンシャンでのバビロニア起源書記文書の存在、前13世紀スサと他都市間の緊張など）はイラン国立博物館刊行の前川編研究書で報告される。博物館蔵レンガ碑文解析を実施し、成果を公刊した。また表面摩耗が激しいアンシャン出土文書を3Dモデル化して、文字サインを読解した。粘土板を「掘込む」楔形文字解析に3Dモデルの有用性を証明できた。本研究によるイラン各地の遺跡調査の成果も上記研究書で公刊される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ウル第3王朝によるフジスタン支配の歴史事実の確定、前2千年紀前半アンシャンにおける書記養成テキストの発見など、本プロジェクトはバビロニアとイランの相関について多くの新発見をなしえた。これらの成果は、ペルシア語訳を付してイラン国立博物館により英文公刊される。また我々は同博物館蔵レンガ碑文群を公刊し、碑文の形式分類法について重要な寄与を行った。このように本プロジェクトはイラン国立博物館の全面的な協力のもとに実施しえた。現在の国際情勢のもと対イラン文化交流にはさまざまな阻止要因があるが、本プロジェクトは困難を克服したのであり、日本―イラン文化交流史において高評価される作業であると自負している。

研究成果の概要（英文）：The present project has studied various aspects of the political and cultural relationship between Mesopotamia and the south-western region of Iran in the late 3rd millennium BC and later. These topics will be treated by K. Maekawa ed., Ancient Iran (Ancient Text Sources of the National Museum of Iran 2, Tehran, 2020). The brick inscriptions housed at the National Museum of Iran have also been studied by the research members under the museum's permission: E. Matsushima, Sh. Watanabe and H. Teramura, Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: A Catalogue (Ancient Text Sources in the National Museum of Iran 1, Kyoto, 2018).

研究分野：楔形文字学

キーワード：イラン　メソポタミア　楔形文字資料　イラン国立博物館　３Ｄモデル　スサ　エラム　アンシャン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

古代メソポタミアとイラン（とりわけ南西イラン）は歴史的、地理的に深く結びついているけれども、それらを明らかにする素材としての資料、すなわち南部バビロニア出土の粘土板およびイラン出土の楔形文字資料は、従来ともすれば独立的に取り扱われてきたために、両世界の関連性が見逃されがちであった。

本プロジェクトメンバーは長くバビロニア出土粘土板資料に関心をよせてきたが、2010 年代にはいってイラン国立博物館と深い協力関係をむすぶことができた。博物館は所蔵する楔形文字資料（粘土板テキストおよびレンガ碑文）を研究出版する許可を我々にたいして与え、その結果すでに我々は博物館所蔵の膨大な資料を写真として保持している。また、本プロジェクトメンバーの幾人かはイランの歴史地理学を専門とし、イラン各地の遺跡状況に精通している。

このような背景のもと我々は前 3-1 千年紀にかけての両世界の交渉と反発の過程を本プロジェクトにおいて実施しようとかんがえたのである。

２．研究の目的

本プロジェクトは、古代イラン（とりわけ南西イラン地方）とメソポタミアとを切断不可能な世界として捉え、それぞれの時代においてイラン―メソポタミア世界がどのように「協同」あるいは「反発」しようとしていたのか、またメソポタミアからの「圧力」に抗してイラン諸地域がどのようにして「自立化」の途を歩もうとしていたのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究において用いられた主史料は、既刊南部メソポタミア出土の楔形文字テキストおよびイラン出土資料、とりわけイラン国立博物館が所蔵する未公刊楔形文字文書群であった。また進展しつつあるイラン各地の考古発掘の成果なども参照された。

南部バビロニア出土の粘土板から得られる情報をふまえつつ、イラン国立博物館所蔵の粘土板（主としてテル・マルヤン粘土板資料、スサ、チョガザンビル出土レンガ碑文）を精査し、両世界の交渉の過程をあきらかにすることに努めた。

また、イランフジスタン地方の遺跡を踏査することによってこの地域におけるバビロニアからの影響の度合いを明らかにすることに努めた。

４．研究成果

メソポタミアと南西イランとはすでに前 3 千年紀初頭から密接な交渉があったが、南西イランは前 23 世紀頃よりしばしばメソポタミアの強大な国家組織によって侵略された。前 21 世紀における南西イランへのメソポタミアからの政治的圧力にかんして、本プロジェクトは、これまで知られていなかった重要な史実をおおくあきらかにすることができた。そのひとつは、イラン国立博物館所蔵の未刊資料のなかからウル第 3 王朝の初代王ウル・ナンマ王碑文の断片を発見できたことである。これは南西イラン・ファルス地方から将来したものであるが、すでに初代王の時代からこの地域までウル王権の力が及んでいたことを示す重大な発見であった。さらに南部バビロニアのギルス（テルロ遺跡）から出土した諸文書を材料として、本プロジェクトは、ウル第 3 王朝 2 代王シュルギ治世 30 年代に、ウル王朝のなかでもっとも有力な属州であるギルスが、フジスタン地方のスサ領域に、穀物およびゴマ栽培のための広大な耕地をあらたに開発していた事実を発見した。収穫された穀物がウル王権のために留保されていたのであるから、この開発はギルスの自律的な経済活動ではありえなかった。ウル王権はペルシア湾および運河の交通によってバビロニア南部とりわけギルスと南西イラン諸都市を結びつけ、さらにスサを南西イラン経略の橋頭保としていたのである。スサでの耕地開発にあたっては、ギルスからの労動者たちが動員されていた。一方この時代にはギルス領域でも、南西イラン出身の兵士たちに土地を分与するために、あらたに耕地が開発されていたことも証明できる。さらにこれは、前 3 千年紀末におけるゴマ栽培の西方への伝播という農業史にとっての重要トピックに重要な寄与をなすものであった。すでにこの時代、夏作物であるゴマの栽培は、インドから、ほんらい冬作物のみを栽培していたイランに、くわえて中部メソポタミア・ディヤラ地域あたりまで拡大していたが、我々の発見は、メソポタミア最南部は大規模なゴマ栽培を、隣接するスサ領域でおこなったとする想定を可能にするからである。

さてウル王権のバビロニア支配は、イラン国立博物館蔵アンシャン（マルヤン遺跡）出土粘土板テキストによっても確認することができた。我々がイラン国立博物館によって研究・公刊を委託されたマルヤン文書の大部分は、前 2 千年紀後半に書かれたエラム語行政記録であった。それらはほぼすべて横長形状の「行」の並列という独特の形状をもっているが、我々はそのなかに、ほんらい長方形であったであろう一粘土板断片を発見できた。テキスト表面の激しい摩耗のため完全な解読までにはいたっていないが、これはほとんど全文がシュメール語述語で構成されている行政文書であり、アンシャンに設立された大組織での日々の飲料、パン支給などの量が記録されていると結論できる。これはおそらく前 21 世紀、アンシャンが南部メソポタミ

ア（シュメール）のウル第 3 王朝時代に制圧されていた時期に、メソポタミアとかかわりのある一組織（おそらく神殿）のためにシュメール語教育を受けた書記によって書かれた行政記録なのであった。ウル２代王治世第 33 年、アンシャンがウルによって軍事占領、破壊されていたことはすでによく知られていた事実であるが、我々が発見したテキストはその後のアンシャンとウル王権との関係を知る上で欠かせないものである。なお、本プロジェクトはウル王の対アンシャン戦争にあたって、ギルスの漁夫たちが兵士輸送に動員されたことも指摘している。そしてギルスの人々がスサで耕地開拓をおこなったのは、ウル王によるアンシャン占領・破壊の直後であった。本プロジェクトは、ウル王権の南西イラン経略が２代王治世 30 年代に決定的な局面を迎えていたことの証明でもあった。

前 2 千年紀にはいって南西イランの土着権力がバビロニア支配から脱するが（いわゆるスカルマフ時代）、この時代でも南部バビロニアとの文化接触は絶えることはなかった。このことを我々はイラン国立博物館蔵アンシャン（マルヤン遺跡）出土文書からも確定した。アンシャン文書群のなかから、数列やシュメール語人名を記録したいくつかのテキストを発見することができたからである。おそらくこれらの年代は、他のほとんどのアンシャン行政文書と異なって前 2 千年紀前半（スカルマフ時代）にさかのぼり、書記養成のために書かれたテキストと推定できるのである。なおこれは、南西イラン内での「地域」について、重要な問いを投げかける。これまで南部バビロニアに起源をもつ書記養成テキスト、あるいは書記の練習テキストは、南西イランではもっぱらスサにおいてのみ出土していたからである。では本プロジェクトにおいて発見されたアンシャン書記テキストは、スサを経由してアンシャンに到来していたのか、それともバビロニアとの交流の結果それらがアンシャンに直接導入されたのか、これについて我々は、残念ながらまだ解答を得てはいない。

スサと他地方とのあいだの複雑な関係は、チョガザンビル出土レンガ碑文にも反映していた。前 2 千年紀の後半、エラム王ウンタシュ・ナピルシャは、スサ南東 40 キロにあらたな王都を建設している（アル・ウンタシュナピリシャ 〔チョガザンビル遺跡〕）。スサから離れることによって、バビロニア文化伝統からの自立を目指したのであろう。後述のように、我々はイラン国立博物館が所蔵するレンガ碑文を公刊したが、碑文のなかでもっとも多いのは、ウンタシュ・ナピリシャ碑文であった。ただ皮肉なことに、エラムの新都の中心部にはバビロニア型の巨大なジックラトが建設されたのである。

前 12 世紀末、バビロニア（イシン）王ネブカドネザル I 世がスサを制圧したさい、エラム王フテルドゥシュ・インシュシナクがアンシャンに移って抵抗し、アンシャンがスサにたいするイラン＝エラム自立のための拠点となるという伝統が護持されていたことが、我々のプロジェクトによってあきらかとなった。

イラン国立博物館所が所蔵する楔形文字資料のなかで我々のプロジェクトにたいして、研究、公刊の許可が与えられたのは、主としてスサおよびチョガザンビルから出土したレンガ碑文およびアンシャン（マルヤン遺跡）出土の粘土板文書群である。すでに我々はこれらのテキストそれぞれについての写真撮影を終えていたが、まず本プロジェクトでは 270 レンガ碑文を公刊することができた。E. Matsushima, H. Teramura and Sh. Watanabe, *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran* (K. Maekawa ed.-in-chief, Ancient Text Sources in the National Museum of Iran Vol. 1, 2018, Kyoto University Press). 本研究書では、それぞれのレンガ碑文が写真およびテキスト翻字付きで公刊されている。我々が公刊したテキストは、バビロニア地方を中心地域とするウル第 3 王朝の 4 代王時代（前 3 千年紀末）、前 2 千年紀前半南西イランの自立権力の成長期（いわゆるスカルマフ時代）、中期エラム期、そして前 12 世紀のシュトゥルク王朝期に書かれている。イラン国立博物館のレンガ碑文のなかでは、前 14 世紀中期エラム期のウンタシュ・ナピリシャ王の碑文がもっとも多数を占めているが、本研究書は、これらについて、書式の差異に応じた細密な分類原理を採用した。我々は、これらのレンガ碑文公刊によって古代イランにおける王権イデオロギー研究のための重要な素材を提供したのであるが、また同時に、我々はレンガ碑文の形式分類のための基礎作業をおこなうことができたのである。

本プロジェクト班員および研究協力者の他、日本、イラン、米国、フランス、ベルギー研究者の寄稿による研究書が、すべてペルシア語全訳を付して、イラン国立博物館より公刊される。K. Maekawa ed. (with Persian translation by P. Daneshband), *Ancient Iran: New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Studies* (K. Maekawa ed.-in-chief, Ancient Text Sources in the National Museum of Iran Vol. 2, 2020 [in press]). 上に述べた成果の多くは、この書内の個別論文（Maekawa, Susa and Girsu-Lagaš in the Ur III period; E. Matsushima, A royal inscription of Huteldush-Inshushinak from Tall-i Malyan; W. Mori, Two Sumerian cuneiform texts from the National Museum of Iran）において詳細に論じられている。

我々はまた前 2 千年紀後半のアンシャン行政文書群の詳細な研究、およびカタログ化をイラン国立博物館より委託されており、本プロジェクトにおいて我々は各テキストの手写および翻字作業をほぼ完了させている。その成果は将来、我々の研究叢書第３巻として公刊したい。

なお、レンガ碑文やアンシャン出土粘土板、とりわけ後者の多くは破損がはげしく、あるいは断片のみが保存され、またしばしばテキスト表面が激しく摩耗しているため、解読は困難をきわめる。けれども我々は重要とおもわれるテキストにかんし、それらを 3D モデル化することによって、肉眼では不可能な、破損楔形文字サインの解析に成功している。3D モデル化された粘土板テキストが博物館の啓蒙活動に利用であることはすでによく理解されているが、粘土板

を「掘込む」ことによってできあがる楔形文字の解析において、3D モデル化作業がいかに有用であるかが、本プロジェクトによって証明された。これについては、さしあたって上記研究報告中の Sh. Watanabe and H. Teramura, 3D modelling of the cuneiform tablets and bricks possessed by the National Museum of Iran を参照されたい。
楔形文字資料の分析にくわえて、本研究ではイラン各地での遺跡探索が実施されている。成果の一部は上記研究報告書で公刊される（T. Kawase, Masons and quarries in the Persepolis royal economy; S. Haruta, Historical importance of the Izeh plain: Viewed from later periods)。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Kazuya Maekawa	４．巻 Orient Supplement 1
２．論文標題 Sowing and harvesting in rows: Irrigation agriculture in late third-millennium Babylonia	５．発行年 2019年
３．雑誌名 I. Nakata et. al. eds, Prince of the Orient: Memorial Volume for H. I. H. Prince Takahito Mikasa	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kazuya Maekawa	４．巻 1
２．論文標題 On the Sumerian terms for ‘ donkey ’	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Nouvelles Assyriologiques Breves et Utilitaires 2018	６．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川瀬豊子	４．巻 -
２．論文標題 多民族国家アケメネス朝ペルシア帝国　ダリウス1世：「アンシャンの王」から「帝国の統治者」へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 八尾師誠編『イランの歴史を知るための50章』明石書店（出版予定）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森若葉	４．巻 87
２．論文標題 京都大学総合博物館所蔵楔形文字粘土板資料(1) ―古バビロニア時代不動産売買文書	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西南アジア研究	６．最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺村裕史	4．巻 42巻1号
2．論文標題 情報考古学的手法を用いた文化資源情報とその活用	5．発行年 2017年
3．雑誌名 国立民族学博物館報告	6．最初と最後の頁 1-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 春田晴郎	4．巻 55巻
2．論文標題 カノープス星と港湾都市カノーボス、カノポス壺	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ORIENTE	6．最初と最後の頁 14-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前川和也	4．巻 -
2．論文標題 イラン国立博物館所蔵レンガ碑文・粘土板文書の調査研究	5．発行年 2020年
3．雑誌名 イラン文明を守る―日本とイランの協力の足跡―	6．最初と最後の頁 71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kazuya Maekawa	4．巻 -
2．論文標題 The Iran-Japan Project of Ancient Texts	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Archaeological Research and Preservation of Cultural Heritage in Iran	6．最初と最後の頁 66-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計17件（うち招待講演　4件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 前川和也
2．発表標題 計量・計算・会計処理：古代シュメールの楔形文字文書行政
3．学会等名 関東会計研究会（明治大学）（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 前川和也
2．発表標題 ウル第3王朝期における「種子・役畜飼料」計算の合理化
3．学会等名 第61回シュメール研究会（立教大学）
4．発表年 2018年

1．発表者名 前川和也
2．発表標題 Kokushikan University and Third Millennium Babylonia
3．学会等名 10th International Iraqi-Japanese Congress（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 春田　晴郎
2．発表標題 ハハーマニシュ朝ペルシア王碑文における州（dahyu-）再考
3．学会等名 第61回シュメール研究会（立教大学）
4．発表年 2018年

１．発表者名 春田　晴郎
２．発表標題 ゲティ美術館所蔵パルティア語銘文付「鹿のリュトン」と関連銀器
３．学会等名 第25回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 春田　晴郎
２．発表標題 イランにおける「都市」を表わす語の変遷
３．学会等名 日本オリエント学会第60回大会（京都大学）
４．発表年 2018年

１．発表者名 春田　晴郎
２．発表標題 イスラーム以前イラン研究の最近の動向
３．学会等名 第38回イラン研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yamauchi, K., W. Mori & H. Yamamoto
２．発表標題 Building a Handwritten Cuneiform Character Imageset
３．学会等名 LREC 2018 Miyazaki
４．発表年 2018年

１．発表者名 前川和也
２．発表標題 ウル第3王朝王族の土地経営
３．学会等名 第60回シュメール研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kazuya Maekawa
２．発表標題 The Ur III state project of exploitation of crop fields in southern Babylonia
３．学会等名 Toyal Ideology Projected through Legal and Administrative Thought in Anatolia, Mesopotamia and the Bible
４．発表年 2017年

１．発表者名 森若葉
２．発表標題 京都大学総合博物館所蔵未公刊未粘土板資料：古バビロニア不動産売買文書
３．学会等名 第24回西アジア言語研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 森若葉
２．発表標題 楔形文字：字形と構成の特徴
３．学会等名 ＡＡ研共同利用・共同研究課題「アジア文字研究基盤の構築１」2017年度第2回研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 春田晴郎
２．発表標題 ペルセポリス近傍の新バビロニア風遺跡Tol-e Ajoriについての研究動向紹介
３．学会等名 第61回シュメール研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 春田晴郎
２．発表標題 サーサーン朝以前のペルシス地方君侯の称号：「こぶ牛の銀皿」銘文の再考
３．学会等名 第24回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Seiro Haruta
２．発表標題 Introductory Overview: What are ‘Cities’ in the Achaemenid, Parthian and Sasanian Periods?
３．学会等名 International Workshop “Sasanian Cities”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Seiro Haruta
２．発表標題 Neo-Elamite, Middle Iranian and related inscriptions on metalware kept in Japan
３．学会等名 The 9th Europaean Conference of Iranian Studies（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 春田 晴郎
２．発表標題 サバーハ・コレクション銀器のエリュマイス銘文：パレオグラフィーと年代
３．学会等名 第26回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Kazuya Maekawa, Eiko Matsushima, Hirofumi Teramura, Shunsuke Watanabe	４．発行年 2018年
２．出版社 Kyoto University Press	５．総ページ数 326
３．書名 Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｘｔ　Ｓｏｕｒｃｅｓ　ｉｎ　ｔｈｅ　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｍｕｓｅｕｍ　ｏｆ　Ｉｒａｎ Vol. 1, Brick Inscriptions in the National Museum of Iran, A Catalogue	

１．著者名 Kazuya Maekawa (ed.)	４．発行年 2020年
２．出版社 National Museum of Iran	５．総ページ数 英文部分226
３．書名 Ancient Iran: New Perspectives from Archaeology and Cuneiform Texts (in press, with Persian translation by P. Daneshband)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川瀬　豊子 (Kawase Toyoko) (10195092)	大阪樟蔭女子大学・学芸学部・客員研究員 (34409)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	寺村　裕史 (Teramura Hirofumi) (10455230)	国立民族学博物館・人類文明誌研究部・准教授 (64401)	
研究分担者	森　若葉 (Mori Wakaha) (80419457)	同志社大学・研究開発推進機構・共同研究員 (34310)	異動：2019年9月1日
研究分担者	春田　晴郎 (Haruta Seiro) (90266354)	東海大学・文化社会学部・教授 (32644)	